

学内広報

2025.1.27

no.1590



医学部附属病院入院棟Aの「蛇杖」レリーフ



学生生活支援のワンストップ・サービス

UTONEの現在地

白鳳丸の調査航海でわかったこと

能登の海底で何が起きたのか

「知」「人」「場」を提供するキャンパスライフの案内人 UTONE (UTokyo One) の現在地

学生の多様な学びを支え、大学生活をよりよいものにする新システムの開発が進んでいます。その名はUTONE（ユートーン）。教養学部PEAKでの試用と学生の要望を聞くワークショップを経て、次の段階に踏み出そうとしている開発チームの皆さんに、これまでの経緯と現状、展望について紹介してもらいました。在学生だけでなく高校生や卒業生も見据える期待のシステムとは？

コロナ禍の2020年に検討開始

真鍋 2020年に検討が始まった当初、Campus Management Systemの頭文字をとってUTokyo CMSと呼ばれていたのが、UTONEです。

松田 当時はコロナ禍の最中で、学務の手続きがオンラインだったり対面だったりバラバラ。学生の手続きが一つの窓口ですむようにしたいという思いがありました。通常、学生は履修登録にUTASを使い、講義資料入手や宿題提出にUTOLを使っています。部活動やボランティア活動など、授業以外の課外活動も学生生活には重要ですが、在学中に何をやったかを学生が一覧できる手立てはありません。一方で大学側からすると、学生のデータを蓄積し分析できればカリキュラムに活かすことが期待できます。こういう傾向の学生は成績が落ちやすいからこの時期にサポートしよう、といった対応も考えられます。オープンキャン

パスなどを通じて入学前に大学との接点がある人もいます。入学前の活動がわかれば、高校時代に理学科のイベントに参加した学生に物理関連の授業を紹介する、といった働きかけもできます。さらに、卒業後、履修した授業に関連する社会人講座の案内をすることもできます。入学前から卒業後まで、大学との関わりを深められるシステムを、という構想でした。

真鍋 当時、米国のトップ大学がCMSの導入を始めつつありました。特に、入学前の若者の目をどう大学に向けるかというマーケティングの文脈です。

学生の満足度を高めるために

松田 米国では授業料が高く、大学は商品と同様に厳しく選択されます。中退を防ぐために、学生生活をモニターして個々に応じたケアを提案することもされています。東大はそこまでシビアではないですが、学生の満足度を高めたいという思いは同じ。学生時代の満足度が高け

れば、卒業後に寄付してくれるかもしれないし、就職した企業で東大と共同研究を始められるかもしれません。

真鍋 学生満足度と大学経営力の向上を目的に、2022年度からPEAKで運用を始めました。UTASとUTOLのデータをUTONEで利用することができますが、UTONEで入力した情報をUTASとUTOLに同期する機能は未実装です。

松田 課外活動の情報は本人が入力する必要があります。入力の仕組みはすでにありますが、使われていないのが現状です。

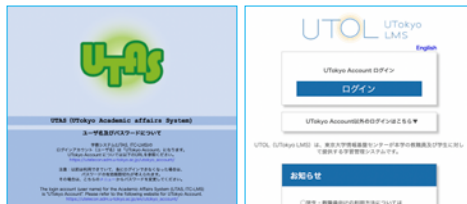
ワークショップで学生の声を

真鍋 UTONEを使う学生にとってどういう機能があったらよいかを探るため、2024年の8月と9月に学生や教職員の皆さんとワークショップを3回行いました。東大はシステムがバラバラなので統合するという声が大きかったのは確かです。UTONEが目指す方向が間違いないとわかりました。その後の検討を経て、24年度中に駒場、26年度中に全学に範囲を広げるという当初の予定を見直し、25年度末に全学展開することにしました。範囲を段階的に広げると複数のシステムを並行して使う期間が生じるので、機能を絞って全学展開できるシステムを作り、それを拡充していくことにしたのです。

UTONE 開発チームの皆さん



学務のUTASと学習管理のUTOL



学務システムのUTAS (UTokyo Academic affairs System) では、学生がシラバス閲覧・履修登録・成績確認などを行い、教員はシラバス登録・履修者名簿確認・成績登録などを行います。学習管理システムのUTOL (UTokyo LMS) では、教職員がお知らせや教材等を掲示できるほか、学生が課題を提出したりテストを受けたりすることができます。

UTONE (現行版)の画面



①ログイン画面。②ホーム画面。大学側からののお知らせが表示されます。③シラバス検索の画面。過去の履修履歴やキーワードから調べることもできます。④カレンダー画面。自分専用の予定表でスケジュールを確認できます。

まず実装したいのは、掲示板機能。たとえば留学に関心がある工学部生には、留学と工学部に関する情報が表示されます。希望に応じて内容を設定できる掲示板です。もう一つは学修ポートフォリオ機能。入学時等に記した大学生活の目標をどこまで達成したかがわかるものです。目標のためにどの講義が必要かを考えて選び、学期ごとに達成度を記録します。

全学の授業からくまなく検索

松田 所属学部の日割に限らず、大学で身につけたい力に合った授業を全学から履修してほしいのです。現行のUTASのシラバス検索は、最初に学部を選んでから絞るので、ざっくりした興味しかない状態では使い勝手がよくありません。UTONEでは数千に及ぶ全学の講義から検索できる機能を実装していきます。

真鍋 アメリカでは学修ポートフォリオを携えて就活に臨む文化があります。日本もその方向に進むかもしれません。

松田 企業にエントリーシートを出す際には大学で何を学んだかを書きます。習慣的に活動を蓄積していけば、就活時に一から書き起こさなくてすむでしょう。

真鍋 ゆくゆくはポートフォリオを進学選択でも活用するという可能性もあります。

松田 ワークショップでは、進学選択の情報入手の難しさが学生から多く指摘されました。学生は高校時代に模試で大学の合格可能性判定を見て決めるのに慣れています。進学選択ではそうはいかず、希望学科に進めるかどうかかわからないの

が不安なようです。たとえば、学生のポートフォリオを学部側が参照できれば、成績以外の要素も考慮できるでしょう。

真鍋 ワークショップでは研究室検索の充実を求める声も多くありました。ある分野を専門的に研究していて他分野には興味がない学生が、UTONEから別の分野をリコmendされて、それが研究上のすばらしい出会いにつながるという可能性に期待しています。

松田 いまでも、単位が取りやすいと聞いて履修したら面白くてその分野に目覚めたという学生はいました。システムから推薦されて奏功する例もあるはず。

お節介でも手をかける

真鍋 単位の取りやすさを学生たちがまとめた表で授業を決める学生もいますが、それ以外にも授業の情報があれば参考にするでしょう。先輩とのつながりが持つコミュニティ機能や研究室検索の機能などは、ワークショップで要望を聞いてあらためて重要さを認識しました。思うに、積極的にお節介をするのがUTONEかもしれません。東大生に余計なお節介は不要だとの声もありますが、お節介が新しい世界の扉を開くきっかけになることもあります。

松田 コミュニティとして大学が運営するSNSを望む声もありましたが、既存のUTokyo Slackを有効に使ってもらうことを考えたほうがよさそうです。

真鍋 2027年秋開講予定のCollege of Design (CoD) の自由度が高いカリキュラムを支えるのもUTONEの重要な

役目と考えています。

松田 CoDでは課題を解決するためのデザインを学ぶわけですが、その対象は多種多様です。関連する科目を選んで履修する際、目標をしっかりとてないとカリキュラムが組めませんから、シラバス検索と学修ポートフォリオの充実は必須です。UTONEがCoDを支える基盤とならないといけません。

真鍋 新しいUTONEが動き出すと教職員の業務にも当然影響します。学生と接する現場の教職員の皆さんにもご協力いただきながら有用なUTONEを作りあげていきます。引き続きよろしく願いいたします。

ガイドブック構想



2025年度末の全学展開に向け、共通理解構築を目的に作成されたガイドブック。「学びを案内する」では、学修ポートフォリオ、学びのAIコンシェルジュ、履修リコmend、シラバス検索、単位チェックが、「つながりを案内する」では学生コミュニティ、ロールモデルマッチング、教員・研究室検索、卒業生ネットワークが、「学生生活を案内する」では事務提出書類アップロード、メンタルヘルスサポート、キャンパス貢献ポイントといった機能が検討されています。ガイドブックは大学総合教育研究センターのウェブサイト <https://www.he-u-tokyo.ac.jp/> でご覧ください。問い合わせは utone@he-u-tokyo.ac.jp まで。



白鳳丸緊急調査航海報告

令和6年能登半島地震
から1年能登の海底で何が
起こったのか?

2024年元日に発生した能登半島地震を受け、全国の研究者が協力して行われてきた、調査船・白鳳丸による緊急調査。1月16日からの第一次航海を皮切りに第三次まで行われた調査の内容を紹介する報告会が12月21日に渋谷キューズにて行われました。調査でわかったこととまだわかっていないことについて研究者たちが語ったパネルディスカッションの模様をダイジェストで紹介します。

地震学にとって未経験の現象

沖野 報告では2020年頃から群発地震が続いていたとの話がありました。群発地震に伴う大地震の事例は多いのですか。
篠原 有名なのは長野県の松代群発地震です。24年前には三宅島付近で大きな群発活動があり、その期間に三宅島が噴火しました。伊豆半島東部では1980年頃から群発地震が数年ごとに起きていますが、2012年以降はありません。海外で有名なのはイタリアのラクイラ。2009年に約3ヶ月続いた後に大地震が発生した例があります。ただ、能登のように4年近くも続くのは珍しく、マグニチュードが7.6という大きなものは聞いたことがないです。100年ほどの歴史を持つ地震学にとって未経験の現象だといえます。
沖野 11月26日にはマグニチュード6.4の地震が能登半島の西側で起きました。関連はあるのでしょうか。

尾鼻 タイプとしては逆断層というものです。余震分布を見ると、1月の地震は北東-南西方向でしたが、11月のものは南北方向でした。1月の地震の滑り量から計算すると、羽咋沖断層付近では地震発生を促進する方向に力がかかっています。1月の地震の影響で地震活動が活発化する場所で発生したとはいえるでしょう。
沖野 先ほどの報告で、群発地震の際に流体が深部から上がってきていたという話があ

りました。流体とはどんなものでしょう。
鹿兒島 断層が水の通り道になると、地下深くにある元素が表層で観測されることがあります。この水には、海水の成分も、地下の泥に圧力がかかって出てきた成分も、さらに深いところからくる成分も含まれます。3月の航海で輪島沖の海底堆積物を調べると、海水でなく、泥由来でもなく、もっと深い場所から来たものが含まれました。能登の地下深部にたまった高压の流体が断層に入って地震の引き金になったとの説があります。水の起源と地震の関係を調査中です。

沖野 本震後の経過や生態系への影響などを金沢大学でも調査していますね。

5ヶ月で海に生物が戻った?

佐川 金沢大学の環日本海環境研究センターは、能登町の九十九湾に臨海実験施設を持ち、小型船を使って海洋研究を進めています。元日の地震で被災しました

が、船は無事だったので、12日から調査を開始しました。22日に珠洲市の様子を船から撮った写真では、陸の土砂崩れが海に入り海水が濁っています。水深32m地点で2月に採取した堆積物の画像を見ると、最下層に生物活動で混ざった痕跡があり、その上に縞模様の層、さらに縞のない細かい泥の層があります。陸の土砂崩れの堆積物です。同地点で7月にも堆積物を採取すると、元あった縞模様が半分ほど崩れていました。底生生物が戻って泥をかき乱したと考えられます。
沖野 5ヶ月で生物が戻ったとは、早いんですね。東日本大震災のときはもっとかかったと思います。会場にいる生物の研究者といえば……兵藤先生、一言どうぞ。
兵藤 はい。生態系の回復は人間が思う以上に早いのだと思います。東日本大震災の際は、非常に高い防潮壁という人工物が陸と海を隔て、生態系の回復に影響を与えたのかもしれない。

プログラム
@渋谷キューズスクランブルホール

11:30 ~	開会挨拶 (兵藤晋)
11:45 ~	第一次・第二次緊急調査航海報告 (尾鼻浩一郎、篠原雅尚)
12:15 ~	第三次緊急調査航海報告 (朴進午、山口飛鳥、佐川拓也)
12:45 ~	ポスター展示見学、コーヒープレイク
13:15 ~	パネルディスカッション (尾鼻浩一郎、篠原雅尚、佐川拓也、朴進午、山口飛鳥、鹿兒島涉悟 司会: 沖野郷子)
14:00	閉会挨拶 (小平秀一)

総合司会: 濱崎恒二

主催: SHIBUYA QWS Innovation協議会 / 大気海洋研究所 共催: 海洋研究開発機構



石川県能登地方を震源とする地震に関する本学の取り組みについて→



沖野 元日に起きた地震で、直後の調査は非常に大変だったと思います。どうして1月16日から調査ができたのでしょうか。

地震直後に調査の準備を開始

篠原 海底地震観測のグループには、大地震が起こればすぐ観測しようという意識が以前からあります。大地震直後に起こる余震は本震の性質を反映するので、すぐに観測することが重要なんです。1月16時10分に地震が発生した後、報道で事の甚大さが伝わり、17時30分頃から研究者間でやりとりを始めました。地震計が何台準備できるか、船が何隻出せるかといった照会を全国の研究機関に行い、5日には情報が揃って、14日に船に機材を積み込むことができました。

沖野 第三次調査は全国公募でしたね。
朴 海底の断層が動いて津波を起している、と関係者で話しました。AORIの持つシステムが断層調査に向いていたので、これを使おうということになりました。ただ船がないと調査はできません。AORIは共同利用・共同研究拠点ですから、共同研究でないと船が出せません。そこで緊急公募をかけたんです。調査計画を審査して、スケジュールを調整し、なんとか3月に調査を行うことができました。

沖野 山口さんが使った水中ドローンはAORIの機材ではなかったですね。

山口 レンタル品を2週間借りました。操作は自分が習いに行き覚えました。空のドローンの操作経験があり、スティック操作が同じだったのでできました。

沖野 現地近くにいた佐川さんは、揺れたとき群発地震の続きだと思いましたか。
佐川 2023年5月の大きい地震から余震が収まりつつありましたが、金沢大学の地震研究者が地震はまだ終わっていないという情報を出していたので、一連の地震なのかなという感じは持ちました。

沖野 能登の実験施設は人が常駐ですか。

実験施設の車が動けないまま

佐川 飼育する魚を毎日世話をする必要があり、毎日研究者が来ていました。現地撮った写真には、魚の世話で元日16時5分に来た研究者の車が写っています。地震で崖が崩れて車が動けなくなり、いままのままです。車のドライブレコーダーには前面の岸壁が崩れる様子が記録されていました。人的被害は免れましたが、施設の被害は大きかったです。

沖野 鹿児島さんは地震の日に白鳳丸に乗って沖縄トラフの調査中だったとか。

鹿児島 はい。船上でニュースを見て地震を知りましたが、最新情報が入手できず、どれくらい逼迫した状況なのかわかりませんでした。大学からは学生の安否を確認せよと通達があり、受け持ちの学生の安否はすぐに確認できました。情報が集まるにつれ、思ったよりひどい状況だとわかり、ほかの乗船者に申し訳ありませんでしたが、途中下船させてもらい、富山に戻って能登に入りました。

沖野 来場の皆様は興味があって来て聞いてくれています。興味のない人に情報を伝えるのは難しいですね。篠原さんは地震学会の広報担当理事ですが。

篠原 地震学会も悩んでいます。やはりマスコミの伝達力は強いのでその力を借りるべきでしょう。学会ではSNSの活用も探っていますが、まだまだですね。

会場の参加者との質疑応答より

会場1 調査で一番大変だったことは何ですか。

山口 一番効率よく調べられる場所を決めることです。普段は地元の皆さんに聞くプロセスを踏みますが、今回は時間が全然ありませんでした。

尾鼻 地震観測でもどこに装置を設置するかが肝でした。海底の谷に装置を置くと回収が困難になるので、適した場所を選ぶことに気を遣いました。

会場2 大きな装置を海底に置く際、海底の生態系への影響を考慮しているのでしょうか。

尾鼻 装置を浮上させて回収する際に海底に錘が残ります。金属の塊ですが、負荷を与えるのは事実。現実的な解は見つからないのが現状です。

会場3 今回の調査でお金はどれくらいかかっていますか。出どころはどこですか。こういう調査をしるなど、何か指図は受けているのですか。

沖野 ざっくりですが、白鳳丸を動かすだけでも一日200万円程度はかかってしまいます。

篠原 地震計については、消耗品だけで数百万円かかります。お金は文科省から受けていますが、指図は特になく、研究者が自分で考えて一番成果が出るように進めるよう促されています。

会場3 自由に使えるなんて羨ましいですね。

会場4 私は石川県出身です。能登に人が戻るには、次の地震がいつなのか知ることが必要です。この地震は2000年に1回だと言われれば戻れますが、100年に1回なら戻りにくい。予測の展望は？
篠原 たとえば南海トラフの予測ができるのは、過去の履歴がある程度わかるから。能登の場合は過去の履歴が残っておらず、現在の地震学の知見ではわからないというのが正直なところです。

山口 地質学的に見ると、今回の地震の特徴は、能登の北部沿岸で広範囲な隆起があったことです。地形変化の履歴から能登北部沿岸の段丘の一部のなりたちはわかりますが、段丘ができた年代の決定は進んでいません。たとえば佐川先生の堆積物の研究はそこにつながると期待しています。

教養教育の現場から

第67回

リベラル・アーツの風

東京大学が全学をあげて推進してきたリベラル・アーツ教育。その実践を担う現場では、いま、次々に新しい取り組みが始まっています。この隔月連載のコラムでは、本学の構成員に知っておいてほしい教養教育の最前線の姿を、現場にいる推進者の皆さんへの取材でお届けします。

1年生が大学の科学の技法と出会う必修科目

／初年次ゼミナール理科

EX部門
特任准教授
宮島 謙

——初年次ゼミナール理科は2015年度から続いている授業シリーズですね。

「私は2023年4月から運営を担当しています。少人数でのグループワークを通じて大学の研究の世界を体験する、理系1年生の必修科目です。大学生活や卒業後の人生につながるきっかけを、第一線の研究者と密に接する環境で得てほしいという思いで設計されました。授業数は全部で100。理系分野をほぼ満遍なく網羅する科目を、学内各局局から選出された先生方に担当していただいています」

7年ぶりに教科書を刷新

「この授業では、2017年に刊行した『科学の技法』を教科書として使ってきました。あればより授業がわかるという推奨図書で、科学的な技法について解説した基礎編と、代表的な授業を紹介する実践編が主なコンテンツです。この本を7年ぶりに改訂し、2024年3月に第2版を出しました。実践編では14の授業を紹介していましたが、うち9編を差し替えることに決め、私と同僚で分担して授業を取材。1授業4ページで紹介しています」

「学生は開講曜日別にグループ分けされた授業のなかから履修希望を複数選んで

登録します。第3週開始前に抽選結果が出ますが、第一希望が通らないこともあります。教科書に収録した授業のほかにも多様な授業があります。巻末の授業一覧では講義題目と担当教員名に加えて、各授業のタイプ表示を加えました。問題発見・解決型、論文読解・演習型、データ解析型、ものづくり型、フィールドワーク型、現象シミュレーション型、原理説明・伝達型の7つから、該当するタイプを担当の先生に選んでもらいました」

——どんな授業を紹介していますか。

「たとえば、『工学×デザイン——ワークショップで学ぶ理系のためのデザイン』(村上存・泉聡志)です。直径1.8ミリのパスタ30本をホットボンドで自由に接着して橋を作り、一番重い荷重に耐えられたものが勝ち、という「パスタブリッジコンテスト」が名物で、人気を集めています。構造力学の知的遊戯として、以前『タモリ倶楽部』でも紹介されました。「駒場キャンパスやその周辺のまちを歩きその空間について考える」(中島直人・廣井悠)は、構内の体育館裏などのスペースや駒場の街をどうしたらもっと活性化できるかを議論する授業です。自身も授業を受けたことがあるという

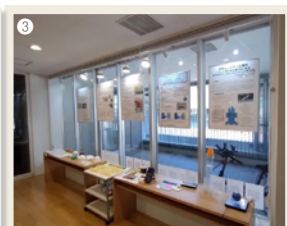
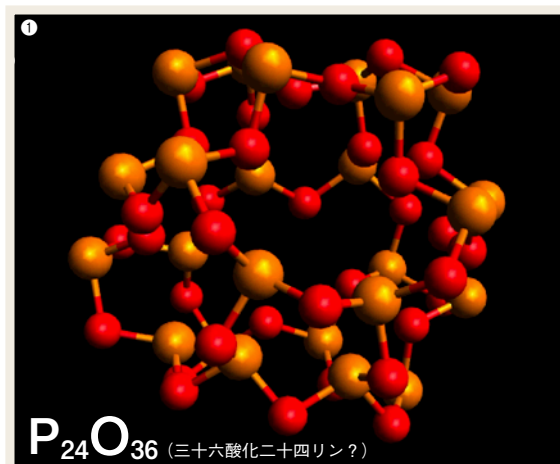
TAのサポートが的確で面白かったです」

新しい物質をデザインしてみる

——宮島先生の授業も載っていますね。

「私は物理化学、特に原子や分子が集まるクラスターが専門で、水素などのガスを当てるとクラスターにどのように付いたり離れたりするかを真空中で計測してナノサイズの物質の性質を調べています。授業では、好きな元素の原子を好きな数だけ用いて3次元シミュレーションを行うソフトウェアを使い、分子の形を組み立ててもらっています。気になる元素の性質やその元素が入った物質を調べた上で、実在できるか否かは気にせず新物質をデザインしてみる。この元素がこんな形で入っていたらこういう機能があると予測しながら、物質の本質に迫る物理化学の世界を知ってもらおうというわけです」

「学生のアンケートを見ると、第一希望ではない授業だったがおもしろかった、という声が少ないからあります。他の授業だと進学選択の点数を気にしてピリピリする部分もあるでしょうが、この授業では点数評価がなく、判定は合否のみ。のびのびと学問に触れるなかで今後につながる何かと出会えるよう願っています」



①宮島先生の授業「分子の形を知り、物質をデザインする」で学生グループが作成した新分子。十酸化四リン(P₄O₁₀)という化合物を拡張したら……というアイデアでした。②比重の違いを体感するために授業で使ったタングステンやタンタルなどの元素試料。③初年次ゼミナール理科の成果物を展示する21 KOMCEE Eastの通称「EXラボ」。④『科学の技法 第2版』(東京大学出版会、2023年)

ぶらり 構内ショップの旅

第32回

カフェ・フォレスト@本郷キャンパスの巻

「カメラリア」の味をカジュアルに

伊藤国際学術研究センター1階にあるフランス料理店「レストランカメラリア」に併設されている「カフェ・フォレスト」。カメラリアのシェフが作る料理を、より気軽に楽しめる座数13席のカフェです。コロナ禍でしばらく休業していましたが、2023年7月に営業を再開しました。

ランチメニューは「デミグラスビーフのオムライス」(¥1400)、季節の「パスタ」(¥1300)、週替わりの「フォレストプレート」(¥1400)の3品。

全てにプチ・サラダと食後のコーヒーまたは紅茶が付きます。多くの人が注文するというのがオムライス。バターライスとトロトロの卵の上には、フンドボーと赤ワインソースで煮込んだ牛すね肉のソースがかかっています。濃厚な味わいでファンも多いとか。現在の季節のパスタは「サーモンカルボナーラ いくら添え」(2月くらいに変更予定)。食物アレルギーにも対応しているので、注文時に相談してほしいと話すのはマネージャーのバガレ・レクナートさん。

お昼時はすぐに満席になりますが、開店直後の11時頃か13時以降だと比較的空いているとのこと。

13時以降は喫茶としての利用もできます。デザートは2種類。「ショコラテリーヌとイチゴ バニラアイス添え」(¥700)と「アイスクリーム2種盛り合わせ」(ピスタチオ、ほうじ茶、チェリー、バニラから2種選択。¥550)。ドリンクはコーヒーやカップチーノ、紅茶などの温かいもののほかに、生ビールやスパークリングワインなどのアルコールも提供しています。「時期は未定ですが、ベジタリアンやハラルに対応したメニューも提供したいと考えています。多くの人にお越



マネージャーの
バガレ・レクナートさん



上：サーモンカルボナーラ いくら添え。下：ショコラテリーヌとイチゴ バニラアイス添え。



営業時間●
11時-17時(食事
LO.14:30 ドリンクLO.16:30)
日・祝休み

<https://hotel-chinzanso-tokyo.jp/restaurant/plan/todaicafe/>

価格は税込

#WeChange Now

第11回 ジェンダー・エクイティ推進オフィス通信

女性幹部養成プログラムの ネットワーキングイベントを開催



多様性包摂共創センター ジェンダー・エクイティ推進オフィスは、昨年度に引き続き、2024年12月9日、「#WeChange 女性教員幹部養成プログラム ネットワーキングイベント」を開催しました。情報学環・福武ホール 福武ラーニングシアターに、学内の様々な部局から、49名の女性教員が集まりました。イベントでは、開会挨拶として、田野井慶太郎オフィス長から、東京大学の女性教員数が伸びているものの、女性部局長が不在であるという現状についての説明があった後、林香里理事・副学長と、部局長経験者である物性研究所 森初果教授、史料編纂所 本郷恵子教授による座談会を行いました。座談会では、それぞれの先生方の部局長としてのご経験、女性が部局長として大学運営に関わることの困難ややりがいについてお話がありました(座談会の様子(動画)は後日公開予定です)。

座談会の後に、登壇者を交えて、ワールドカフェ形式で5人前後のグループでディスカッションを行いました。ディスカッションでは、東京大学を良くしていくためのアイデアを、紙や模造紙を用いて、可視化しながら話し合いました。途中メンバーを変えて3回話し合いを行い、様々な意見をグループ内で共有したのち、グループごとに、模造紙を示しながら、話し合われた内容を発表しました。そこでは、「ダイバーシティ委員会などは女性教員が担当することが多い。誰もが入る委員会にしていくといいのでは」「女子学生がなぜ増えないかといえば、居心地がよくないという問題がある」「ロールモデルを見せていく必要があるが、一度研究から離れてもまた戻れるなど、様々な人生があることをアピールできるといい」「日本語が母語ではない構成員向けの発信がもっと必要」など様々な提案が出ました。その後の懇親会でも議論は尽きず、充実したイベントになりました。

(ジェンダー・エクイティ推進オフィス 特任研究員 久保京子)

<https://wechange.adm.u-tokyo.ac.jp/>

ワタシのオシゴト 第224回

RELAY COLUMN

情報学環・学際情報学府 杉田七海
総務チーム主任

図書館団地に潜む魅惑の情報学環



防災訓練グッズと（学環長は防災専門家です）

私のオシゴトバである大学院情報学環・学際情報学府は、2000年に創設された比較的新しい大学院で、「情報学環（研究）」と「学際情報学府（教育）」という二つの組織から構成されています。場所は「図書館団地」と呼ばれる大きな建物の一画にあります。

私の所属する総務チームでは、総務や人事に関する幅広い業務を遂行しています。私の主な担当業務は、教職員の採用～退職に関する手続きの他、手当支給やネットワーク関連、電子投票等々です。内容が多岐にわたる上、ちょこちょこと予期せぬ事件（例：蛇の出没相談）も起きるので、全く飽きません。程よい緊張感に震えながらも、充実感たっぷりです。優しく温かい教職員の皆様に囲まれて、ドキドキ楽しく働いているうちに、あっという間に4年が経ってしまいました。

プライベートでは、アウトドアが趣味の人間に憧れて、7歳の娘とキャンプに奮闘中です。（やはり、屋根と壁がある生活は有り難いですね…！）



焚火で煮るマシュマロはカリトロで最高です

得意ワザ：蚊のつかみ取り（空中捕獲。夏に暗躍中…）

自分の性格：のんびり屋の外見とは裏腹にせっちな脳内
次回執筆者のご指名：斎藤愛さん

次回執筆者との関係：元同僚（隣チーム）で高校の後輩

次回執筆者の紹介：オシャレなバイリンガルです♪

専門知と地域をつなぐ架け橋に

Field Study FS レポート!

第35回

総合文化研究科修士課程1年 宮下祐真

高校生とオリーブの島の地図づくり

読者の皆さんは「小豆島」と聞いて何を思い浮かべるでしょうか？オリーブの産地であることや「からかい上手の高木さん」の舞台になったことなどを思い浮かべる



瀬戸内芸術祭、「はじまりの刻」

かもしれません。私たち5人は香川県小豆島の土庄町でのFSの活動を通して、小豆島の多様な魅力を知ることができました。瀬戸内国際芸術祭で世界中からアート作品が集まること、SUPとロッククライミングなど海と山の両方のアクティビティを楽しめること、日本三大そうめんの1つである「島の光」やごま油メーカーの国内最大手の「かどや」の発祥地といった食の名産地であること、県内で有数の進学実績を誇り毎年全国高校駅伝に香川代表として出場する高校が存在することなど、この瀬戸内海の離島には数えきれないほどの魅力が詰まっています。一方で宿泊施設や公共交通などのインフラ不足や雇用や教育機会の不足による若者の島外流出などの社会問題にも直面しています。

私たちは以上のような小豆島・土庄町の実情を知る中で、移住先として土庄町を選んでくれる人を増やすために、「小豆島中央高校の高校生と行うアートを中心とした新たな小豆島の観光マップの作成」を活動テーマとして設定し、地図の作成に取り組んでいます。小豆島には毎年約500人が移住しています。最も大きな移住のきっかけになっているのは、瀬戸内国際芸術祭を中心とした観光です。しかし、島には芸術祭後もアート作品が多く設置され、芸術家の移住が進む一方で、アート作品が一覧できる地図がなく、島民のみが知る観光情報が観光客に知られず、観光のリピーター率が低いという課題があります。そこでアートなどの観光情報を掲載した地図を新たに作成し、より多くの人に小豆島の魅力を知ってもらい、移住の促進に繋がりたいと考えています。また作成にあたっては9月の現地活動で2日間にわたってワークショップに意欲的に参加してくれた高校生の力を借りようと考えています。



高校生とのワークショップ

2025年に開催される瀬戸内国際芸術祭に向けて、高校生と共に島の魅力を詰め込んだ地図を作成し、来島客にオリーブだけではなく小豆島の良さを知って

もらうために今後も活動に尽力していこうと思います。

※メンバーはほかに竹内彩乃（文一2年）、盛田忍之（文一2年）、猪原卓良（理二2年）、前田誠磨（理二1年）

インタープリターズ・ バイブル

第209回

生産技術研究所／情報学環 准教授
科学技術コミュニケーション部門

川越至桜

ミステリーと科学技術

小学生の時にエラリー・クイーンの名シリーズに出会い、ミステリー小説や探偵小説を読むのが好きになった。最近は積読（未読のまま積まれた状態）になりがちだが、気になる小説があるとつい購入してしまう。緻密なプロットを味わいながら意外な真相を突き止めるべく、様々なパーツを組み立てながら読み進めていくのはとても楽しい時間である。そういった意味で、リアル謎解きゲームや脱出ゲームも好きである。

こういった小説において、科学は重要な役割を果たしてきた。例えば、19世紀のシャーロック・ホームズシリーズでは当時の新しい科学技術が多く取り入れられ、20世紀半ばのアガサ・クリスティの作品では毒物の知識が頻繁に用いられた。21世紀に入ると、DNA解析やAI、サイバーセキュリティといった最先端の科学技術がトリックの鍵となることが増えている。このように、ミステリー小説における科学技術の活用は、科学技術の進歩を反映しているとも言える。

科学技術コミュニケーションにおいては、常に進化し続ける科学技術をどのように伝え、社会が科学技術をどのように捉えていくか、科学技術と社会とのつながりを考えていく必要がある。そういう意味では、最新の科学技術を取り入れた小説を通して、科学技術が日常生活にどう影響するのかを伝えることができるかもしれない。一方で、小説では現実の科学技術や社会とは異なる形で提示されることもある。従って、科学技術コミュニケーションの文脈では、科学的事実と物語の境界を理解し、正確性を保ちながらも、科学技術と社会との関係を親しみやすい形で伝えていくことが求められる。

科学技術は時代と共に変化し続けるため、それを題材にした小説や謎解きゲームのトリックもまた変化を続けるだろう。小説やゲームを楽しみながら、科学技術と社会との適切なつながりについても考えていきたいと思う。



積読とリアル謎解きゲームのキット（一部）

科学技術インタープリター養成プログラム

ききんの

寄付でつくる東大の未来

き

第63回

本部渉外課副課長

藤田明子

目指すは寄付率10%超え！

東京大学も賛同パートナーとして参加している「12月は寄付月間～Giving December～」を受け、今年も教職員への「ひとり1,000円寄付キャンペーン」を展開しました。

しかし、全学会議やメールで「寄付に協力してください」と呼びかけたぐらいでは、おいそれとはいきません。ちなみに、昨年（2023年度）における教職員の寄付率は5%台でした（△-）☆。

今年（2024年度）こそは、せめて寄付率を二桁にしたい！という思いから、〈寄付〉をもっと身近に感じてもらうべく、本郷、駒場、柏の各キャンパスで「寄付キャンパスキャラバン」を12月に開催し、実際に目で見て直接説明を聞いて寄付を体験してもらえる機会を設けました。役員、幹部教職員を筆頭にピンクの法被を着ての活動が功を奏し、計100名以上の方に足を運んでいただきました（ピンク色は寄付のシンボルカラーです）。この活動を通じて2025年3月までに10%を超えられるよう、更に学内構成員の寄付文化醸成に力を入れていきたいと思っています。

ところで、そもそも皆さんは「寄付」に対してどんなイメージを持っていますか？

かくいう私は、困っている人を助けるために裕福な人がお金をあげる行為だと思っていました。ところが実際に寄付をしてみると、寄付＝困窮者への援助、だけではありませんでした。寄付後に寄付先から届いた活動報告を読むや否や、実際に活動しているのは自分ではないにもかかわらず、なにやら気持ちが盛り上がったのです。私は経験がありませんが、〈推し活〉をする楽しみとはこういうものなのでしょうか？

まだ寄付をしたことのない方、また、寄付を迷っている方、折しも2027年は東京大学創立150周年です。この機会に〈寄付活〉を始めて、東大を応援してみませんか？（寄付率10%超えにもご協力お願いします☆）また、すでに寄付をしている推し活ならぬ〈寄付活〉仲間の皆さま、これからも一緒に東京大学を応援してまいりましょう！



寄付キャラバンの様子

東京大学基金
はこちら↓

トピックス 全学ホームページの「UTokyo FOCUS」(Features, Articles) に掲載された情報の一覧と、そのいくつかをCLOSE UPとして紹介します。

掲載日	担当部署・部局	タイトル（一部省略している場合があります）
12月6日	本部経理課	第3回東京大学債券「UTokyo Compass債」の発行条件を決定
12月9日	大気海洋研究所、新領域創成科学研究科、物性研究所	第15回「未来をのぞこう」を開催
12月10日	教育学研究科・教育学部	令和6年度教職課程・学芸員等実習報告会を開催
12月10日～	広報室	日本最南端の東大施設で小型霊長類の繁殖に取り組む＝横田伸一 オホーツク文化と擦文文化が出会う場所で進む土器圧痕調査と考古学実習＝太田圭 原虫も宿主も人の意識も踏まえたリーシュマニア症の感染症疫学＝三條場千寿 水深5780mの海底に潜航しじっくりと広がる鉱物資源を調べる＝大田圭一郎／広報誌『淡青』49号「知の冒険者たち」
12月12日	医学部附属病院	戸田達史教授がベルツ賞を受賞
12月13日	情報理工学系研究科	学生-修了生交流イベント「情報理工学ネットワーキング」を開催
12月17日	本部広報課	令和6年度退職教員の最終講義12月・1月開催分のお知らせ
12月20日	本部社会連携推進課	東京大学と岩手県との連携協力に関する協定締結について
12月20日	公共政策大学院	新たな政府統計の分析が明らかにした「裁量労働制」の労働環境への影響
12月24日	数理学研究科	駒場キャンパスに数学の国際研究拠点を設立
12月27日	本部総務課	2024年度業務改革総長賞表彰式を開催
1月6日	本部協創課	インベリアルカレッジロンドン、東京大学、日立製作所が共同イベントを開催
1月7日	本部入試課	令和7年度大学入学共通テスト東京大学試験場案内（本郷・教養学部試験場）
1月7日	本部広報課	2025年 藤井総長年頭挨拶



CLOSE UP

第15回「未来をのぞこう」を開催（大気海洋研究所、新領域創成科学研究科、物性研究所）



↑パネルトーク。
←ティータイム。
本企画はキョクシアホールディングスのご支援を受けて実施されました。

10月26日、女子中高生の理系進路選択支援を目的としたイベント「未来をのぞこう！」を現地とオンラインにて開催、女子中高生を中心におよそ70名が参加しました。

大気海洋研究所の兵藤晋所長による開会挨拶の後、同研究所の岩田容子准教授の司会進行のもと、大学院生3名によるパネルトークが行われました。パネルトークには新領域創成科学研究科の石田悠華さん（D2）、物性研究所の渡我部りささん（M2）、大気海洋研究所の武田沙蘭さん（D2）が登壇。研究テーマ、理系進学を決めたきっかけ、大学・大学院での生活の様子、研究の楽しさや大変さ、今後

の目標、就職先などについて紹介し、会場からの質問に応じました。ティータイムでは、お菓子を食べながら進路選択、大学生活、就職活動など様々なトピックについて、相談会を行い、3名のパネラーに加えて学生7名が多くの質問に答えました。参加者からは、「ずっと興味があった東大に入って、研究してみたいと思うきっかけになりました」「苦手意識のあった理系科目に興味湧くほど、面白く興味深い内容でした」「今後の勉強の原動力になりました」「今まで避けていた理系にも興味湧きました」など、理系進学を前向きに考える感想が数多く寄せられました。

表紙について

本誌には、新年1号目の表紙に干支の動物にまつわる画像を掲載する習わしがあります（1978年1月発行の392号から）。吉例に則り、巳年の今回は、医学部附属病院入院棟の壁面に配置されている蛇杖のレリーフを掲載しました。

広報誌『東大病院だより』No.30（平成12年5月1日）によれば、2000年に入院棟Aが新造されるにあたって「これからの医療・医学にけるわれわれの気持ちを現そう」ということになり、学内外からデザインを募って据えられたもの。制作者は博報堂のアートディレクターだった合田彰氏です。

レリーフは4枚1組で入院棟Aの東西面に配置されています（向かって左から、鉄門、蛇杖、ふくろう、銀杏の順）。表紙に掲載した蛇杖は、ギリシャ神話に登場する医神アスクレピオスが手にしている杖で、1匹のクスシヘビ（薬師蛇）が絡まっています。医療のシンボルとして世界中で知られており、蛇杖の図案はUnicodeの記号としても採用されています。それぞれのレリーフには、当時の武谷雄二病院長のたつての希望で、記念すべき竣工年の2000の文字が追加されたとのこと。それからはや25年。アスクレピオスの蛇は今日も病院で働く東大の医療従事者たちを見守っています。



本郷キャンパスの御殿下グラウンド横からは入院棟Aの壁面に据えられた4つのレリーフがよく見えます。鉄門は東大医学部の紋章で、銀杏はもちろん東大のシンボル。ふくろうはギリシャ神話に登場する知恵・知識の女神アテネの象徴です。右の図案はUnicode U+2695で入力できるStaff of Aesculapiusの記号。



CLOSE UP ICL×東大×日立の共同イベントをロンドンで開催

(本部協創課)



ICLのホワイトシティキャンパスで10月17日に行われたパネルディスカッション

10月、インベリアルカレッジロンドン(ICL)、東京大学、日立製作所は、学際的な研究ワークショップとグリーン経済におけるイノベーションに関するパネルディスカッションなどの一連の共同イベントを開催しました。三者の連携がさらに強化され、カーボンニュートラルへの移行とその先にある重要な挑戦的課題について、より深い協力関係を育みました。参加者は3日間にわたってICLの

キャンパスに集い、日英共同イニシアティブのための重要な研究テーマについて深く検討しました。議論は、脱炭素化、炭素循環、炭素会計、重要資源、グリーン研究のための資金調達と市場化への道筋、気候変動対策技術の社会的受容性など、幅広い分野に及びました。出席者はそれぞれの専門知識を出し合うことで、差し迫った課題に共同で取り組むための新たな研究開発の機会を見出しました。



CLOSE UP 岩手県と連携協力に関する協定を締結

(本部社会連携推進課)



締結式は岩手県庁にて執り行われ、藤井輝夫総長(左)と岩手県の達増拓也知事(右)が出席しました

東京大学と岩手県は、12月19日、連携・協力に関する基本協定を締結しました。これまでに積み重ねてきた協力関係をより一層強化し、岩手県の復興および地域課題に迅速かつ適切に対応し、活力ある個性豊かな地域社会の形成、発展に寄与するためのものです。

岩手県と東京大学とは、1973年に東京大学海洋研究所・大槌臨海研究センター(現:大気海洋研究所大槌研究拠点)が岩手県大槌町に設置されて以降、長く様々な連携を続けてきました。特に2011年の東日本大震災以降は、東京大学と大槌町(岩手県上閉伊郡)の間で震災復旧及び復興に向けた連携・協力

に関する協定書を締結し、大槌町以外でも東京大学の多くの部局が、被災地の復旧・復興と地域課題の解決に向けた積極的な活動を展開してきました。これらを背景として、東京大学と岩手県のさらなる連携強化を通じ、希望郷いわての実現を目的として全学包括連携協定を締結しました。今後、東日本大震災津波及び大規模自然災害からの復興の推進、地域の課題対応のための学術研究の推進、地域における取組みを通じた人材の交流と育成、学術研究の成果の社会実装、その他本協定の目的を達成するために必要な事項において、さらなる連携を進めていきます。



CLOSE UP 2024年度東京大学業務改革総長賞表彰式を開催

(本部総務課)



総長賞の取組内容を紹介するShareWelチームの柳澤准教授(工学系研究科)

業務改革総長賞表彰式が、12月18日に大講堂(安田講堂)で開催されました。対面開催と並行してZoomのウェビナー配信を行い、本郷地区キャンパス以外の教職員も参加しやすいよう配慮した表彰式を挙行了しました。

表彰式では、全教職員を対象に募集した業務改革課題の中から選出された10課題(総長賞1課題、理事賞3課題、特別賞6課題)に対し、藤井総長ならびに角田理事(業務改革担当)から表彰状と副賞が授与されました。また、組織として継続的に業務改善に取り組む姿勢が評価された1部局に優秀奨励賞が授与されました。

表彰に引き続き、藤井総長による講話、受

賞者による取組内容のプレゼンテーションが行われ、会場・ウェビナー参加を合わせて延べ900名以上の教職員が参加し、受賞を祝うとともに優れた業務改革のアイデアを共有しました。

【総長賞】

受賞課題/モノと知の循環プラットフォーム「ShareWel」受賞者/ShareWelチーム 取組内容/ECCSアカウントでログインし、手軽に不要物品の出品・引き受けができるWebサービスを構築。フリーマーケットアプリのように視覚的なやり取りが可能で、従来ポータルへの通知やメールによる連絡調整が煩雑となっていた譲渡手続を効率化し、学内のモノの循環を促すことでカーボンニュートラルの実現に貢献。



UTokyo 一杯のコーヒーがつなぐ世界

一杯のコーヒーが、世界の生産者を支える力になることをご存じですか？生産者が安定した生活を送り、産業が健全に発展するためには、多くの人がその現状を知ることが大切だという池本幸生名誉教授のメッセージをこの商品に込めました。タイ北端のドイトウンでは、かつてアヘン栽培に頼っていた少数民族が、コーヒー栽培を通じて経済的自立を果たしています。美味しいコーヒーを味わいながら、その一杯が支える世界に思いを馳せてみませんか？(原)



箱入 ¥1,000
(10g×6/パッケージ入り)



ボトル入 (粉)(豆)
各 ¥1,850

UTCCからのお知らせ

utcc.u-tokyo.ac.jp



→オンラインストア



「一身にして二生を経る」ということ

東大柏キャンパスのある千葉県柏市から、単線の成田線にゆられて銚子に向かう途中に佐原という町がある。利根川に面した水郷として知られ、江戸時代に水運の中継地として栄えた。十七歳の伊能忠敬はここで造り酒屋の婿養子となり、商売で財をなし、四十九歳にして隠居、つまり経済的な自由と時間を手に入れた。そこで彼は江戸に出て天文学を学び、その延長で当時としては驚くほど精密な日本地図を作ることになる。残念ながらその日本地図の上呈本は明治の皇居炎上で焼失し、東京帝国大学に保管されていた副本も関東大震災で焼失したという。過日、佐原の伊能忠敬記念館で現存する地図を見たが、その正確さと緻密さには感嘆させられた。また、地球の大きさを測定するという当初の目的や、正確な時計がないために経度測定が難しかった話など、非常に興味深いものがある。本稿の表題は福沢諭吉の述懐だが、伊能忠敬の人生も違う意味で「二生を経た」といえるだろう。

考えてみると我々の人生でも、「二生を経る」ことは少なくないと思う。何かを失う、あるいは何かを得ることによって、人生

の意味合いが大きく変わったり、新しい生き方や考え方につながったり、という経験をしている人は意外と多いのではないだろうか。大学で研究をしていると多少の波こそあれ、若い頃に始めたテーマを広げていくことが当たり前になっているが、他の可能性はなかったかと自問することも多い。例えば東京大学にはサバティカル制度があるが、実際にはあまり活用されていない。人は本来自由であるべきだが、我々は何かに縛られすぎていないだろうか。

もう少し視野を広げて大学というものについて考えてみると、「どうすれば社会の役に立てるか」という議論を見る機会が多い気がする。これはある意味、時代的な流れではあるのだろう。しかし大学、あるいは学問の役割として最も素朴で大切なものは、人に文字通り「目からうろこ、eye-opening experience」を与えることではないかと思う。それは「一身にして二生を経る」ための入り口でもある。

板谷治郎
(物性研究所)

